

**歴史と伝統文化の
まち・成田。市内に
は、歴史ある文化財
が多数あります。**

板碑

刻まれた文字は何を語る

お寺の境内などをよく見て歩くと、長方形の形をして厚さが10cm前後、表面には見慣れない文字や絵のようなものが彫られた板状の石が建てられたり、置かれたままになったりしていることがあります。これは鎌倉時代から戦国時代にかけて造られた板碑で、石を板状に加工した塔婆のことで、表面には仏の名前を表した梵字(古代インド文字=サンスクリット)や年号・願文などが刻まれています。願文の内容から亡くなった人の供養であったり、生前に自分の死後の極楽浄土を願うものであったことが分かります。この板碑は江戸時代になるとほとんど見られないことから中世独特の産物といえるでしょう。

市内には年代の判明した板碑は約30基確認されています。最古のものは鎌倉時代の延慶三年(1310)の銘がある新福寺(押畑)の板碑です。次いで元亨二年(1322)の年号を刻む超林寺(台方)、正中二年(1325)の慈眼寺(川栗)の板碑など鎌倉時代のものは6基、南北朝時代が18基、室町時代の板碑は7基確認されています。発見された板碑は、石材や形の違いにより武蔵型板碑と下総型板碑の2種類があります。前者は秩父・長瀬地方で産出される緑泥片岩製。とても加工しやすい材質で関東甲信越地方に広く分布しています。後者は筑波周辺の黒雲母片岩や銚子産の白亜紀砂岩の銚子石で香取郡を中心に分布するものです。成田市では武蔵型が11基、下総型が20基と二つの型の交錯する地域にあたっています。

さて、成田山奥之院の入り口の両側にはめ込まれた板碑の中で、当時の庶民の切実な気持ちが込められた二つの板碑があります。一つは延元元年(1336)に父の百か日の法要に子どもたちが供養に建てたも



赤荻地区から出土した武蔵型板碑(成田山霊光館所蔵)



新福寺で見つかった市内最古の板碑(成田市立図書館所蔵写真)

の、もう一つは七分全得の供養のため明德五年(1394)に建てた板碑です。七分全得とは、死後に供養されても死者が受ける功德は一分で、六分は供養する人の功德になるので、生前に自分の死後の安楽浄土を願えば七分すべての功德を得ることができるという考えです。

初期の板碑は、地方豪族や僧侶によって建てられたことが刻まれた銘で分かりますが、南北朝・室町・戦国時代になると庶民にまで広がりました。戦乱の中一寸先も見えない現世をあきらめ、来世の安楽を切望した人々の祈りが伝わるようです。普段何気なく見逃してしまう石造物。時代の背景や人々の考えを知るための手掛かりが隠されている貴重な資料でもあります。



県指定有形文化財の成田山奥之院の下総型板碑(左が延元元年、右が明德五年の板碑、成田市立図書館所蔵写真)



編集後記

テレビなどに出てくる「せり」の場面で、せり人に向かって仲買人たちが盛んに指で合図をしている光景を目にします。業界用語で「指やり」というのだそうですが、素人にはちんぷんかんぷん。この「せり」を市民に体験してもらおう

と行われたのが、市場まつりの「模擬せり」。開始前には「指やり」の説明があるのですが、始まってしまえば表紙のように手を上げて金額を連呼。絶対買いたいというこの表情をみれば指の形などどうでもかまわないと思いませんか。